



新潟市歴史博物館
博物館ニュース

帆樫成林

Vol.36

ファンクラブ専塚まちあるき

「帆樫成林」とは？

帆柱が林のように多く立つ様子を表した語。人が多く出入りする活気ある「みなと」をイメージしました。

CONTENTS

特集1	みなとびあの資料収集 一民具を中心に	P.2~3
特集2	企画展 「にいがた みなとの仕事 いまむかし」	P.4
歴史さんぽ	戊辰公園 一色部長門君追念碑	P.5
おすすめの一冊	「ベトナムの風に吹かれて」	P.5
特集3	収蔵品展でおひろめ 沼垂・山惣呉服店ゆかりの品々	P.6
館長日記	託された調査「もうひとつの信州「沼垂」の地名」(上)	P.7
収蔵資料紹介	ある新潟芸妓の遺品	P.7
博物館 あちらこちら	新潟市歴史博物館外観(2代目新潟市役所正面入口)	P.8

帆樫成林

—はんしょうせいりん—

新潟市歴史博物館
博物館ニュース
vol.36



■ 帆樫成林「はんしょうせいりん」第36号
■ 編集・発行／新潟市歴史博物館 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10
■ 印刷／株式会社ウエッザップ

【たいげんのひろばプログラム】

楽しみながら、遊びながら、昔のことを学びます。

日時	タイトル	内容	申込み・対象・参加費
1月16日(土) 14:00~15:30	みなとびあもめん部	木綿糸の糊づけの工程を行います。	もめん部部員が対象です
1月17日(日) 14:00~16:00	こども歴史クラブ 染め物をしてみよう	染め物の技法について知り、木綿布を染めてオリジナルのハンカチ作りを行います。	こども歴史クラブの部員が対象です
1月24日(日) 13:30~15:00	布をつくってみよう	空き箱を使った簡単な織り器で裂き織りコースターを作ります。	申込み不要・小学生以上先着15人・無料
2月14日(日) 10:30~12:00	みなとびあで自然体験・冬	みなとびあの敷地で、身近な自然にふれあいましょう。	要申込み・未就学児とその保護者先着15組・無料
2月21日(日) 14:00~15:30	こども歴史クラブ 昔の暮らしの道具を使おう	みなとびあには、衣食住にまつわる昔の暮らしの道具がたくさんあります。どんなものがあるかよく見て、実際に使ってみましょう。	こども歴史クラブの部員が対象です
2月28日(日) 13:30~15:00	押し絵のおひなさまづくり	ハギレを使って、かわいいおひなさまを作ります。	申込み不要・先着15人・無料

お申込みは、電子メール・往復はがきで当館まで。締切は必着です。プログラムは予定となっておりますので、詳細は当館までお問い合わせください。

現在開催中の企画展

にいがた みなとの仕事 いまむかし

みなとびあが位置する新潟西港のさまざまな風景とともに、新潟西港に関わる仕事の移り変わりや港の歴史について紹介します。

会期 2015年12月19日(土)~2016年1月31日(日)

休館日 1/18(月)・25(月)

観覧料 無料 *常設展の観覧は有料です。

主催 新潟市歴史博物館

関連事業 ■展示解説:毎週日曜日 午後2時~(45分程度)

博物館講座

当館学芸員が調査・研究をすすめているテーマについて、毎月第4日曜日にお話します。

【時間】 13:30~15:00 **【会場】** 本館2階セミナー室

【申込】 不要(当日受付・定員80人程度)

【資料代】 100円(資料のない回は無料)

- ◆1月の講座:1月24日(日) 講師:若崎 敦朗
「新潟奉行所の建設過程 一川村修就文書を通じて」
- ◆2月の講座:2月28日(日) 講師:藍野 かおり
「「みなとの仕事いまむかし」補遺」

博物館 あちらこちら

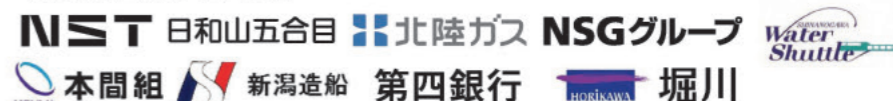
新潟市歴史博物館外観
(2代目新潟市役所正面入口)

当博物館は、2代目の新潟市役所の外観をイメージして建設されています。2代目市役所は明治41(1908)年の新潟大火で初代の建物が焼失したのち、同43(1910)年に現在のNEXT21がある榎谷小路と西堀通りの角地に建てられました。博物館の入り口から離れているので、見過ごされがちかもしれませんが、市役所の本来の正面入り口は、写真の部分になります。4本の柱が並び、下部にアーチ型の窓、壁には植物を象ったようなレリーフが配されています。建物最上部のドーム型の尖塔がシンボリックです。館内に入る前に、ぜひ御覧頂き、当時の建築のモダンな意匠をお楽しみください。



みなとびあ歴史発見プロジェクトは、こどもからおとなまで幅広く、みなとまち新潟の歴史に親しみ、自ら歴史を発見する喜びを知ってもらい、まもなく開港150周年を迎える新潟の街をみんなで盛り上げていこう!という事業です。

「みなとびあ歴史発見プロジェクト」は、下記の地域の企業・団体のみなさんからご協賛をいただいています。



次回企画展

収蔵品「老舗呉服店の蔵のなか」・新収蔵品展

収蔵品展では、沼垂で明治から現代までつづいた山惣呉服店ゆかりの品々を公開します。新収蔵品展では、今年度に新たに収集した資料を紹介します。

【会期】 2016年2月11日(木)~3月27日(日)

【休館日】 2/12(金)・15(月)・22(月)・29(日)
3/7(月)・14(月)・22(火)

【観覧料】 無料 *常設展の観覧は有料です。

【主催】 新潟市歴史博物館

お知らせ

- ◆パネル展示(巡回展)「新潟まつりの歴史をさぐる」(文化庁「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」)江戸の「湊祭」から「新潟まつり」へ。その歴史を紹介します。
- ◆2016年1月9日(土)~1月22日(金) NEXT21会場(1階アトリウム)
- ◆2016年2月4日(木)~3月1日(火) ほんぼーと会場(1階情報展示コーナー)

編集後記

新たな一年が始まりましたが、年度事業は大詰めを迎えています。文化庁の支援を受けて進めてきた、新潟まつりのルーツを探る「湊祭復元事業」は、現在NEXT21を会場に、湊祭の歴史的変遷について最新の研究成果をパネル展示でご紹介しています。2月からは別会場へ巡回しますので、詳しくは上記お知らせをご覧ください、ぜひ機会をみて会場まで足を運ぶください。今年の新潟まつりを新たな視点でお楽しみいただけると幸いです。(中村)

お問い合わせ・申込みは博物館まで...

新潟市歴史博物館 みなとびあ

住所: 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10
Tel: 025-225-6111 Fax: 025-225-6130
E-mail: museum@nchm.jp http://www.nchm.jp
【休館日】 毎週月曜日、祝日の翌日・年末年始(12/28~1/4)
【開館時間】 (4-9月) 9:30~18:00 / (10-3月) 9:30~17:00



みなとぴあの資料収集

―民具を中心に―

森 行人

博物館・美術館などのミュージアムでは様々なモノを資料として収集・保存し、その調査研究を進め、得られた情報とモノを空間に配置する展示を行います。以下では、こうしたミュージアムを特色づけ、事業の基礎となるモノの収集について、人々が日常生活や仕事に使った民具を中心に紹介します。

1 みなとぴあの資料収集の位置づけ

ミュージアムは歴史系の博物館なら歴史の資料、自然系の博物館なら岩石や生物標本、水族館なら水生生物といったように、それぞれの設置目的に応じた方針に基づいて資料を収集しています。

当館は新潟市が設置し、新潟市歴史博物館条例第一条に設置目的として「新潟地域の歴史的特性を明らかにすることを掲げ、そのための事業として第二条(一)に「歴史資料の収集を行うこと」を定めて、資料収集を博物館の設置目的を実現する最も基礎となる事業と位置付けています。資料収集は博物館のいわゆるバックヤードの活動です。将来の博物館として利用者や地域社会へ提供できるリソースを豊かにする

活動ですが、博物館を利用する方にご還元できるものではありません。断片的なモノを集め、積み重ね、資料として整理して保存する作業には多くの労力と時間、保存するための場所などを必要とします。費用対効果では評価できない意義のある事業として、長期的な視野に立って取り組んでいます。

2 資料収集の意義

「新潟地域の歴史的特性を明らかにすること、そのために「歴史資料の収集」することの意義を、新潟市の施策に照らし合わせると次のようになりま

平成十九年度から二十六年まで、新潟市における将来のまちづくりの基本施策をまとめた「新・新潟市総合計画」には「市民が共に育つ、教育文化都市」という理念が記されています。平成の大合併を経て、政令指定都市としてスタートを切った新潟市の新たなまちづくりにおいて、この理念のもと「みなとまち」の発展を支えた進取の精神と「大地と水」を慈しむ心を大切に、「新潟に暮らして良かった」と実感できるまち、次世代に誇りをもって引き継げる

まち／新潟市を、支え合い学び合いつながり共に創り共に育てていきます」と宣言しています。

具体的には「本市は開港五港のひとつという歴史があり(中略)数多くの歴史的な遺産があり」、「こうした歴史文化遺産の保存と活用を図り、本市の個性豊かな歴史・文化を積極的に内外に発信していく必要」とともに、「本市には長い歴史と伝統をもつ『まち』や『むら』にはぐくまれてきた魅力ある文化が息づいており、「その素晴らしさに対する理解を深め、誇るべきものとして市内外にアピールする必要」を課題として提示しています。そのための施策として、地域の歴史や伝統文化を知る上で貴重な財産である歴史資料の収集や調査研究を進めるとともに、施設整備を行い、市民が利用しやすいよう整理し、保存と活用を図るとしています。

3 資料収集の種類

当館では条例に基づき、市が掲げてきた理念を踏まえて資料収集に取り組みできました。収集の対象は地域の歴史に関わるさまざまな事物に及びます。たとえば資料形態としては、手紙や

帳面、日記など文字で書かれた文書、生活道具などの民具、絵画や書、工芸などの美術、絵葉書や写真、刊行された図書などをあげることができます。

文書といえば筆でつづられた古い紙の書類をイメージしますが、実際に収集した資料には木に文字が書かれた高札、金属に文字が記された萬代橋の橋名板、大量の領収書やメモなど多種多様なものがあります。民具の場合は、市域の人々に使われたり、作られたりしたものが地域の生活文化を表す資料として収集対象となります。具体的には着物や着物を入れる行李や箆筒、調理道具や保存の道具、暖房具や照明具、家具など日常の衣食住生活だけでも極めて多岐にわたり、生産道具では農具や漁具、職人の道具など、収集対象は暮らしのあらゆる分野に及びます。主に明治～昭和初期に使われたものを中心に、戦後に普及し始めた初期の家電までを収集しています。これ以降の製品もいざれ歴史資料となり得るのかも知れませんが、ただ、新しい時代の生活・生産用具を含めると数量が膨大になるため、収集の対象とするに至っていません。

4 市内他施設との連携

当館だけではなく、市内各地のさまざまな博物館・資料館等がそれぞれの理念・施策に基づき歴史資料の収集を行っています。民具の場合、合併前から各自自治体に博物館資料館があり、それぞれに地域の民具を収集・保存してきました。当館は、こうした部署や博物館資料館と連携を図りながら、歴史資料を収集しています。また古文書の場合、市歴史文化課が公文書や区有文書など公的な性格を持つ文書、あるいは旧家が蔵する古文書など、比較的規模の大きな古文書群を収集・整理・保存しています。

5 研究テーマによる収集

資料の中には特に力を入れて収集しているものがあります。民具を例にあげると、低湿地稲作の農耕具や内水面での漁具、木造和船やその造船道具などで、地域の歴史的特性を示す研究テーマと位置付けて収集しています。具体的には低湿地の開墾に使ったヤチキリガマ、湿田の収穫作業や稲の運搬に使用するキツォと呼ばれる船、潟や冬季湛水田の漁労に使用した魚網など、実際にこれらの道具を使っていた方から寄贈を受け、収集しています。平野を下する信濃川・阿賀野川の河口部に位置する新潟市域ではかつて低湿地が広がり、農村でも広く木造和船が使われました。低湿地の稲作や湛水田堀・潟・

川での漁労など複合的に展開する生産活動に関わる道具や、こうした活動に欠かせない木造船は地域の生活文化を総合的に考える上で重要な情報を持つ資料です。

より広域的な視点から、市外に所在する資料を収集することもあります。市場で使われた木造船の技術的な背景には日本海一帯の木造船の影響があり、その研究のために市外の船も収集する必要があります。その一例として、寺泊(現長岡市)のマルキという海の漁船を収集し、地域の歴史的特性を明らかにする資料とするともに、展示や講座等に活用しています。

また、郷土史に大きな功績を残した金塚友之丞の調査ノートやメモ、民具など収集品をご遺族や関係者からご寄贈していただき、研究の基礎となった資料群として収集した例もあります。

6 収集作業の例

山惣呉服店の蔵から

当館所蔵資料の多くが市民からの寄贈の形で収集されたものです。民具は、一般には廃棄されてしまうことが多いのですが、日常の用具も当時の生活を示す歴史資料であり、寄附をしたいというご連絡をいただくと、下見に伺った上で館の方針や既収蔵品との兼ね合いを判断して収集しています。

写真は、かつて山惣呉服店を営んでいた沼垂の小林惣英氏の蔵で、事前の調査作業を行っている様子を写したものです。家財の寄贈の連絡を受け、資料と

して受入するための調査を行っているところです。蔵に収蔵された家財を確認し、数回準備作業にお伺いして、二度にわたって搬出作業を行いました。収集した資料は現在整理作業中です。当館の資料収集は、歴史資料を保存する意義をご理解いただいている寄贈者(市民)の方々の存在と、当館へのご連絡から受入作業まで、対応の労をとっていただく善意によって支えられています。

7 資料収集の課題

収集資料は展示や講座で活用するとともに、整理や調査研究を通じて得られた情報は博物館ニュースや紀要など刊行物を通じて発信しています。

しかし、歴史資料全体を概観できるように、目録や資料集を刊行するなど利用者が活用しやすい形での情報発信はできていません。また、絵図のように大型でかつ詳細な図像を持つ資料は、図録ではその情報を十分に伝えきれません。たとえば、タブレット型PCに画像データを入れて情報ライブラリーで閲覧できるようにすれば、利用者が自由に縮小拡大して絵図の詳細を見ることができそうです。予算の削減等により画像データベースを構築するような大きな事業を展開することは難しいのですが、情報機器の価格低下や専門技術者でなくてもデジタル加工ができる環境が普及した現代、小さな予算や手作りでできることがあります。「新・新潟市総合計画」にある、「みなとまち新

潟の歴史や越後平野の町や村の文化など、本市の個性豊かで多様な地域性をもつ歴史・文化を調査・研究し、市内外に広く情報発信することとは、まさに博物館の役割であると考えられます。歴史資料の収集や調査研究を進め、利用しやすいよう整理し、保存と活用を図る活動に地道に取り組むことで、市民による歴史・文化の創造・振興活動に寄与する、本館に市民が必要とされる博物館を目指します。

(もり ゆきひと 学芸員)



山惣呉服店を営んだ小林家の蔵での事前の資料調査

企画展 「にいがた みなとの仕事 いまむかし」 藍野 かおり

みなとびあ歴史発見プロジェクトは、来たる新潟開港一五〇周年に向け、みなとまち新潟の歴史文化を活かして、新潟の街を市民の皆さんと盛りあげる新しい試みです。

このプロジェクトの一環として、企画展「にいがた みなとの仕事 いまむかし」を開催します。

新潟の近代の歩みは開港と同時に始まりました。昭和初期には近代的な県営埠頭が完成し、多くの人と物資が行き来する場となりました。そしてさらに新潟港は大陸の玄関口と位置付けられました。その後、戦争、新潟地震、新潟東港開港や万代島再開港などを経て、港の役割は変化しました。しかし、いつの時代も、船や人、モノの安全な行き来を守るために多くの人が働き、その機能を支えてきました。

【近代港湾の建設】
大正三年、新潟市と沼垂町が合併

し、信濃川の両岸が新潟市になりました。また、明治四十年、大津分水工事が始まり、河口部の水深維持と水量調整の見込みが立ったことから、新潟の街の人々が待ち望んだ近代港湾の建設は、実現に向かいました。

築港は、栗の木川右岸と新川（通船川）の間に幅一七五メートル、面積四万四千坪の埋め立て地を造成し、埋め立て地の北側と中央の二か所に埠頭を突き出す形で計画されました。大正六年に新潟市が埠頭建設に着手しましたが、財政難から新潟県に事業を譲渡しました。工事も雪解けや大雨による出水や冬の荒天で難航しましたが、大正十五年三月に完成し、四月には北埠頭に第一船が入港しました。

【現在の新潟西港】
昭和三十年代、新潟港の周辺はすでに工業化・都市化が進み、拡張の余地が

ありませんでした。経済成長の進む中、新たな臨海工業地域を造成するため、建設されたのが新潟東港です。昭和四十四年に新潟東港が開港し、これまでの新潟港は新潟西港となりました。工業港としての東港と機能を分担し、新潟西港は商業港として発展させることになりました。

昭和五十六年には佐渡汽船ターミナルが万代島へ移転し、万代島再開港により平成十五年に朱鷺メッセが開業しました。萬代橋から下流の信濃川両岸が整備され、みなとさがん・万代島テラスとして、緑あふれる水辺の空間に生まれ変わりました。

一方、新潟西港の県営埠頭と臨港埠頭では、現在もさまざまなモノが行き来し、流通を支えています。全国的にも珍しい木材の筏組風景が見られるのも西港の特徴です（写真）。

【みなとを支えるさまざまな仕事】
港を出入りする船の安全を守るため、新潟では、江戸時代中ごろから、「水戸教」と呼ばれる水先案内がありました。この仕事は代々伊藤家が世襲しました。水戸教の業務は、気象観察、水深の測定、水先案内、海難救助、出入船の記録、調査などでした。築港後、港の水



西港北埠頭での筏組風景

歴史さんぽ



戊辰公園—色部長門君追念碑

中央区関屋下川原町

新潟高校正門のすぐ前に公園があります。「戊辰公園」という名前の小さな公園です。この公園には花崗岩の碑があります。関屋戊辰戦蹟保存会によって建立された「色部長門君追念碑」です。

江戸から明治へと時代が変わる節目となった慶応4（1868）年の戊辰の年。京都の鳥羽・伏見から始まった戦争は北越にその戦線を拡げていました。同年7月、新潟町とその周辺は、新政府軍と奥羽越列藩同盟軍による激しい戦闘の直中にありました。このとき、同盟軍側の新潟町警備の任にあったのが米沢藩家老の色部長門（久長）です。新潟での戦闘では同盟軍側が敗れました。そして現在のこの碑が建つ辺りで、色部長門は最期を迎えました。

戦後、新政府は同盟軍にたいして戦争責任を求めて調査をおこないます。米沢藩は藩を守るため、す

に死亡している色部にその責を負わせました。色部家は家名断絶となり、それが赦免されたのは明治16（1883）年のことでした。

その後、新潟市では昭和7（1932）年に関屋へ、米沢市では昭和38（1963）年に丸の内の上杉記念館（上杉伯爵邸）裏へ、色部を追念するための石碑が建てられました。関屋の碑の裏には、最後の米沢藩主上杉茂憲の長男・上杉憲章の名が見られます。

安宅 俊介（あたか しゅんすけ 学芸員）



色部長門君追念碑(正面) 中央区関屋下川原町



色部長門追念碑 山形県米沢市丸の内



関屋戊辰戦蹟保存会役員集合写真(当館蔵)



色部長門君追念碑(裏面)

おすすめの一冊

ベトナムの 風に吹かれて

新潟市でもロケが行われた映画『ベトナムの風に吹かれて』監督大森樹が、昨年公開されました。主人公のみさお(坂坂慶子)が、認知症になった八十一歳の母「baちゃん」(章村礼子)を連れ、ベトナムで十三年間も暮らした話です。荒唐無稽と思いきや、魚沼出身の日本語教師が書いた、れっきとした実話。下敷きになっています。それが本書。魚沼弁がナマで出てきますが、新潟の人ならそのニュアンスの可笑しさを噛みしめられるはず。痛快なのは、予想に反して外国暮らしを満喫するbaちゃん。ハノイの名所文廟の筆跡を「ひいばから聞いたことある」と言い張り、浦島太郎を持ち出してうなずくあたり、笑いを誘いながらも妙に説得力があります。なるほど……。私たちは誰でも、遠い記憶以前の文化を受け継ぐ固有の存在。ならば、越後のbaちゃんが、実は世界とつながっていたとしても不思議はないのかもしれない。人の世をつむぐ愛があればこそ。

(木村一貫 学芸員)



小松 みゆき 著
角川書店
2015年9月

収蔵品展でおひろめ

沼垂・山惣呉服店ゆかりの品々

中村 里那

沼垂で明治から現代まで「山惣呉服店」を営んだ小林家より、代々受け継がれてきた品をこのたび一〇〇〇点以上ご寄贈いただくことができました。これを記念し、二月十一日から始まる収蔵品展でそのうち数十点を厳選してご紹介する予定です。

山惣呉服店は、創業明治五(一八七二)年、沼垂の上五ノ丁(現在の沼垂東三丁目)に店を構えて平成十四年までつづいた老舗呉服店でした。名が広まったのは二代目小林惣七郎のとき。新潟の名士を紹介した「やまと錦」(一九一六年刊)にはその肖像と店舗の写真が掲載され、同時期の全国商工業者名簿『大日本商工録』にも名を連ねています。沼垂銀行の開業や北越鉄道の沼垂駅設置、日本石油の新潟鉄工所をはじめとする大企業の進出状況を呈していた当時の沼垂町で、代表的な商店の一つとなっていました。

惣七郎は浄土真宗を熱心に信仰し、毎朝、近隣の光照寺への参詣と自宅と店の仏間での勤行を欠かさなかつたといえます。明治二十九(一八九六)年以降、惣七郎は京都の東本願寺へ頻繁に通っており、檀家総代の地位にも就きました。このつながりによって京都の呉服問屋と取引を行うようになったのです。寄

贈資料の中には、刺繍のように柄を織り出した豪華絢爛な唐織の丸帯地がありますが、これは京都・西陣の代表的な織物です。

呉服店を営んだ商家の所蔵品として、中心的なものややはり衣服です。多くは商品ではなく小林家の人々が暮らしの中で使用していたものとのことです。その華やかさは実に見ごたえがあります。松竹梅や鶴などの吉祥文様、御所車や几帳に草花・山水を組み合わせた御所解模様といった古典柄は現代でもおなじみですが、バラやカトリアなどの洋花柄や大胆な配色の着物は今ではあまり目にしません。これらは着物が普段着としてもっと身近だったころのものと思われまます。戦前までは柄や着方にも流行があったそうで、晴れ着としてのイメージが強い現代よりも、人々は自由に着物を楽しんでいたのでしょう。普段着から礼装まで多種多様な衣服の数々には、京都の業者とも取引を行い、新潟・沼垂の町方ほか近郊のだんな衆を顧客に抱えていた有力商家の矜持が感じられます。

また、二代目惣七郎がその多くを集めたという美術コレクションも見逃せません。戦後に手放したのも多いそうですが、今回ご寄贈いただいたものだけで

も、主に江戸中期から近代までの書画を中心に、約二〇〇点に及びます。それらの落款をみると、よく知られた画家たちの名が多数含まれています。日本絵画史の二大流派である狩野派・土佐派のほか、中国書の輸入によって勃興した日本文人画では、先駆者の柳沢淇園、全国的流行となった江戸後期の谷文晁や田能村竹田などの作品がみられます。またその同じころ京都市民間画壇で人気を博した円山派の三代目円山応震や、虎図を得意とした岸駒も含まれています。近代画家では、日本美術院の設立に携わった橋本雅邦や、「東の大観、西の栖鳳」と並び称された横山大観、竹内栖鳳などの作品があります。この千涯が小林家と縁があったことか

ら、その希少な作品も残されています。以上のコレクションも、京都とのつながりから集められたものと考えられます。昭和五(一九三〇)年に店舗を新築した際には、二階で「名画百幅展」を開催したそうです。美的感覚が求められる呉服商にとって、質の高い美術品を持つことは、経営者や職人の素養になり、それがまた、顧客への宣伝にもなったのでしょう。



上から唐織の丸帯地、カトリア柄の羽織、絞りの長着

託された調査 「もつひとつの信州『沼垂』の地名」 (上)

新潟市歴史博物館 館長 小林 昌二

館長日記

Diary from the Director of a Museum

役目柄、いろいろな方の研究調査途中の相談や依頼を受けることがあります。もう十年余も前に「沼垂の今昔を語る会」第四代会長の後藤昇さんから、「兄(第三代会長故後藤藤林八さん)が生前に小林先生に託すよう言ったものです。」と資料を手渡されました。それは「古代沼垂のロマンをさぐり信濃路を行く」という調査旅行の計画書とその旅行(一九九三年十月)記録文、そして民俗学者で郷土史家の小林存氏(一八七七〜一九六一)の講演記録『沼垂記』(ガリ版刷)昭和二十七年十一月新潟市立沼垂公民館刊)などでした。

とから、信州への調査旅行を行行したので。その調査旅行の結論は「ヌタリとニトリをストリートに結びつけることは無理のようです。」というものでした。小生も「ニトリ」がどうやって「ヌタリ」に訛るのか見当もつかず、「そう、無理」だと同感して記憶の片隅に仕舞ったのです。ところが、先日(二〇一五年十一月)、私はある文献で「初穂」を朝廷や山陵に届ける「荷前使」を「ノザキノツカイ」と読むという記載を目にしました。これは承知のことなので何気なく読みとばそうとした時です。「あ」と脳裏をよぎるものがありました。それが後藤さんの結論の一文でした。心の動いた一瞬でした。「荷前使」が、「ストリート」に結びつけることは無理「ヌタリ」と「ニトリ」を、いとも簡単に結びつけることを、私は直感したのです。次号(下)でその直感を考証したいと存じます。

収蔵資料紹介

ある新潟芸妓の遺品

龍甲の櫛や笄、象牙製の三味線の撥、ユニークな帯留めが付いた帯締めなど、かつて新潟芸妓が使用した品物が、今年度当館に寄贈されました。

これらの寄贈品を所有・使用していたのは松嶋家恵美子さんです。彼女は明治三十七(一九〇四)年生まれで、大正時代中ごろに附島家からお披露目し、その後、昭和二(一九二七)年には松嶋家として独立しています。戦前戦後を通して、彼女は新潟芸妓の一線にありました。新潟芸妓二九九人を写真で紹介した大正十五(一九二六)年の『花かがみ 風流万千』(新潟上芸妓組合発行)にも登場しますが、この時はまだ附島家恵美子を名乗っています。平成十四年、彼女は九十八歳でお亡くなりになりました。

り、良く手入れされ大事にされていたことが分かります。芸妓は芸の力量に加え、立ち振る舞いや容姿などの美のスキルも求められます。それらを保ち続けるようとした緊張感が彼女の遺した品物からも伝わってくるようです。おそらく新潟芸妓の氣質を最期まで持ち続けたのでしょう。彼女は数多い新潟芸妓の一人に過ぎませんが、これらの遺品は彼女たちが築いた華やかだった時代の新潟を今に伝えてくれます。

(小林 隆幸 学芸員)



櫛・笄

帯締め・帯留め

三味線の撥



松島家恵美子さん

新潟芸妓は江戸時代以来、花街を彩ってきました。数は減り、柳都振興のように株式会社化し経営スタイルは変化したとしても、唄や踊り三味線などの芸を身につけ、社交場を職場に和装で活躍する彼女たちの基本形はかわりません。繁盛した湊町に培われた文化が今に継承され、新潟の特色ある資源として今も注目されています。

そして、あらためてこれらの品々をながめると、昨日まで使用していたのではないかと思えるほど色あせずに残ってお